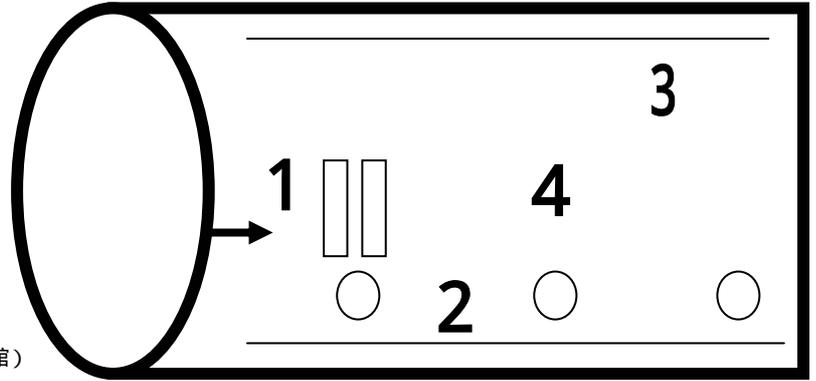


芸大美術館 コレクション展

江戸から明治の金属芸術

2004.7.6(火)-8.29(日)

休館日 月曜日(ただし7月19日は開館、7月20日は閉館)



「金属」という素材で表現された作品という主題を設定して、指より小さな刀装具や仏像から、日本の近代彫刻史の幕開けをもたらしたラグーザ作の数々の胸像、そして東京美術学校生の卒業制作まで、様々な形状、技法、種類の作品を約70点展示。日本の近代において世界的に評価された金属による「美術」作品が、同時期に開催される東京国立博物館の「万国博覧会の美術」で展示、また、国立西洋美術館で開催される「聖杯 中世金工の美術」展ではドイツの優れた金工が紹介されます。これらの展覧会と合わせて鑑賞することで、金属という素材の多種多様で豊かな表現力を知る貴重な機会になれば幸いです。

出品目録

1

後藤程乗 ごとうていじょう 1603-1673

「蟹図小柄」かにずこづか

江戸時代前期 17c. 赤銅魚子地 高肉彫 金色絵

室町時代から続く装剣金工の後藤家9代目。裏は一面金に鑢目が施されている。

一宮長常 いちのみやながつね 1721-1786

「蟹目貫」かにめぬき

江戸時代中期 18c. 銅 容彫 赤銅象嵌

作者は「東の宗珉、西の長常」と表される江戸時代の京都金工の代表的存在。

「蟹目貫」かにめぬき

江戸時代中期 金 容彫 赤銅象嵌 石目打

打ち出した金に赤銅象嵌の目、甲羅には石目と毛彫り。格調高い技と材が全面に表出される。

「野菜図縁頭」やさいずふちがしら

江戸時代中期 赤銅魚子地 四分一高彫象嵌 高肉彫 金・銀・銅色絵

「恵比須目貫」えびすめぬき

江戸時代中期 赤銅 容彫 金・銀色絵 銀・銅置金 赤銅象嵌

鯛を吊り上げ、烏帽子をかぶる七福神の一人。東京美術学校初代彫金科教授加納夏雄の箱書きがある。

鉄元堂茂光 てつけんどうしげみつ 生没年不詳

「加茂競馬図縁頭」かもけいばずふちがしら

江戸時代後期 赤銅魚子地 高肉彫 金・銀・銅色絵 金象嵌

正林武顕 しょうばやしただけあき 生没年不詳

「亀図頭」かめずかしら

江戸時代後期 四分一地 赤銅高彫象嵌 金銀色絵

浜野保随 はまのやすゆき ?-1836

「蓮蛙図縁頭」はすかえるずふちがしら

江戸時代後期 赤銅魚子地 四分一高彫象嵌 金色絵 赤銅象嵌 徳島藩主蜂須賀家の藩工。

石黒是美 いしぐろこれよし 生没年不詳

「百合図縁頭」ゆりずふちがしら

江戸時代末期 赤銅魚子地 高彫象嵌 金銀色絵・銀象嵌

得意の赤銅魚子地に高彫色絵で百合の花と葉を表し、銀象嵌の露玉を付す。

桂永寿 かつらえいじゅ 生没年不詳

「百合図縁頭」ゆりずふちがしら

江戸時代中期 赤銅魚子地 高肉彫 金・銀色絵

二代横谷宗與門下で横谷式赤銅魚子地に高彫色絵をよくした。是美の作との比較が興味深い。

後藤程乗 1603-1673

「獅子香合」ししこうごう

江戸時代 四分一 鍛造 片切彫 毛彫 鍍金 獅子は赤銅 打出 金・銀色絵

菊川 きくかわ

「妙見尊像」みょうけんそんぞう

江戸時代 銀 丸彫 金製光背付

北極星あるいは北斗七星を神格化した菩薩。国土を擁護し災害を滅除し、人の福寿を増すとす。

作者不詳

「自在蟹香合」

鉄・銀 鍛金 眼に金象嵌

自在置物の伝統を美術学校の鍛金教育に取り入れようとした岡倉天心の意を受け、見本として明治31年に購入。

香川勝廣 かがわかつひろ 1853-1917

「柿形香炉」

銅・四分一 鍛金 赤銅象嵌

加納夏雄の後継者として東京美術学校教官・帝室技芸員を務めた勝廣の堅実な技法を示す。明治32年に作家寄贈。

明珍 みょうちん
「蟹形錠」
江戸時代 鉄 鍛造
甲冑師の技術の応用で様々な形態の錠がつくられた。

美方 みかた
「蝦形錠」
江戸時代 鉄 鍛造 銀象嵌

作者不詳
「蝦形錠」
江戸時代 鉄 鍛造 銀象嵌

作者不詳
「魚形錠」
江戸時代 鉄 真鍮 鍛造

作者不詳
「錠」
江戸時代 真鍮 鍛造

2

藤原通廣 ふじわらみちひろ 生没年不詳
「廻鉢形兜」 めぐりばちかぶと
江戸時代 鉄 鍛造 前立は木製漆塗 青糸威
回転する鉢で鉄砲の弾をかわす構造。とんぼは勝虫として武士に好まれた飾り。

辻重次 つじしげつぐ 生没年不詳
「牡丹文鐙」ばたんあぶみ
江戸時代 鉄 鑄造 毛彫 銀象嵌

村田整琨 むらたせいみん 1761-1837
「水盤」
江戸時代 18-19c. 青銅 鑄造
世界各地に散在する「整琨鑄」銘の作品。彼の蠟型の技を示す作品として津田信夫から入手した作である。

津村亀女 つむらかめじょ ?-1772
「鶉香炉」うずらこうろ
江戸時代 18c. 真鍮 鑄造
亀女といえは鶉の香炉。長崎で活躍した女性の蠟型鑄物師で、鑄肌と鑿による仕上げを併用した表現。羽の部分の蓋となっている。

本間琢斎[二代](推定) ほんまたくさい 1846-1904
「柳蓮鷺図花瓶」やなぎはすさぎずかびん
青銅 鑄造
佐渡の蠟型鑄造の祖、本間琢斎の蠟型の味を存分に発揮した作。明治 38 年第 3 回金工協会展出品。

西村雲松[初代] にしむらうんしょう 1859-1912
「麒麟図香炉」きりんずこうろ
真鍮 鑄造
鑄金家初代西村雲松は工部美術学校でラグーザに彫刻を

学び、その後は輸出向けの鑄造作品に従事した。独特な蠟型の透物を得意とし、本作にもその技量が示される。

「女神図メダル」
明治 11 年(1878) 青銅 鑄造
裏の鑄銘「明治十一年四月旧工部美術学校入学試験製作品 西村雲松造」

作者不詳
「両耳花瓶」りょうじかびん
青銅 鑄造
北宋の 12 世紀前半に編纂された「宣和博古図」あるいは、これを参考にした「温知図録」に見られる銅器の図案を元に制作された作。

黒川栄勝 くるかわえいしょう 1854-1917
「龍飾銀盃」
明治 29 年(1896) 銀 打出 鑄造
栄勝は明治鍛金界屈指の作家として挙げられるが、現存する作例が少ない。本作のその貴重な例であるが、鑄造が主役であり、他の作例の確認が待たれる。

作者不詳
「獅子香炉」ししこうろ
青銅 鑄造 玉眼嵌入
玉眼が嵌入され、上の獅子の頭が蓋としてはずせる構造。作者不明だが、ユーモラスな造形がほほえましい。

作者不詳
「八手文電気スタンド」やつでもんでんきすたんんど
真鍮 鑄造

江幡美忠 えばたよしただ 生没年不詳
「鬼花瓶」おにかびん
青銅 鑄造

作者不詳
「牡丹置物」ばたんおきもの
青銅 鑄造
東京美術学校に金工三科がそろった間もない明治 29 年に文部省よりの管理換えで当館コレクションに加わった。

松原如方 まつばらじょほう 生没年不詳
「苞入魚置物」つといりうおきもの
青銅 鑄造
大島如雲の弟子、巴里美術学校卒。苞とはわらを束ねてものを包んだもの。ご馳走の伊勢海老を金属で表現。

白崎白善 しらさきはくぜん 1858-1925
「狛置物」ちんおきもの
青銅 鑄造 真鍮・赤銅象嵌
鑄金の町高岡の白崎善平の流れを汲み、岡崎雪声、大島如雲、香取秀真ら率いる東京鑄金会で活躍。狛はこの時代における愛玩用の人気モチーフのひとつ。

野上龍起 のがみりゆうき 1865-1932

「亀置物」

昭和7年(1932) 青銅 鑄造

三匹を別に鑄造し、蠟型鑄造の鑄肌と研磨仕上げと鑿彫りを使い分け、組み合わせている。作者は大島如雲に師事し、東京美術学校依嘱制作の皇居前の楠公像や上野公園の西郷像の鑄造仕上げを担当した。

「亀置物」(2点)

青銅 鑄造

野上は1900年のパリ万博にも、得意の写実と技巧を凝らした亀数点を出品。

金龍齋義道 きんりゅうさいぎどう 生没年不詳

「親子亀置物」

青銅 鑄造

香取秀真 かとりほつま 1874-1954

「瑞鳥銅印」ずいちょうどういん

青銅 鑄造

香取は最後の皇室技芸員の一人。本作は明治37年(1904)セントルイス万博に出品された東京美術学校出品の飾棚の四段目に配置された。

山田有方 やまだゆうほう 1871-1922

「銀製岩二鶺鴒置物」ぎんせいいわにせきれいおきもの

明治30年(1897) 鳥:銀・赤銅・四分一 脚:四分一

山田の卒業制作も明治37年セントルイス万国博覧会出品の東京美術学校出品飾棚の置物として選ばれた。

坂口晃南 さかくちこうなん 1875-?

「龍筆架」りゅうひっか

白銅 鑄造

明治31年美術学校卒業後、日本美術院に入り、38年より東京美術学校助教授、昭和6年教授。本作は後の鎌倉市長正木千冬より寄贈。

佐藤省吾 さとうしょうご 1885-1983

「矮鶏」ちゃぼ

明治43年(1910) 銀 鑄造 赤銅象嵌

東京美術学校の彫金と鍛金が合併した金工科の卒業制作。

北原千鹿 きたはらせんろく 1887-1951

「多宝塔出現」たほうとうしゅつげん

明治44年(1911) 四分一地 打出 毛彫 金色絵

昭和の工芸の改革を目指す「工人社」主宰として活躍することになる北原の卒業制作。

長沼守敬 ながぬまもりよし 1857-1942

「老夫」

明治31年(1898頃) ブロンズ

ヴェネチア王立学校で学んだ作家が1900年パリ万国博覧会に出品、「鑄銅置物」として金牌を受賞した代表作。

3

山岸俊斎 やまぎししゅんさい 生没年不詳

「獅子置物」ししおきもの

真鍮 鑄造

大島如雲、香取秀真、野上龍起、津田信夫などとともに東京彫工会で活躍した鑄金家の一人。

四谷正美 よつやまさみ 1876-1941

「真鍮製虎ノ丸彫」

明治32年(1899)真鍮 鑄造 岩は四分一 鑄造

明治32年彫金科卒業制作。

作者不詳

「虎置物」

青銅 鑄造

正清華峰 まさきよかほう 1874-1956

「荷曳牛車」にひきぎゅうしゃ

青銅 鑄造

明治33年鑄金科卒業、津田信夫と同級生。卒業制作も当館所蔵。

藤川勇造 ふじかわゆうぞう 1883-1935

「兎」

明治43年(1910) ブロンズ

東京美術学校卒業後、フランスに留学中の作品。その後、晩年のロダンの助手を務めることになる。

オーギュスト・ロダン 1840-1917

「ユーゴー」

1883 ブロンズ

ロダンが多大な影響を受けたユーゴと初めて会った年に制作。しかし、ユーゴはポーズをとることを拒んだ。平櫛田中コレクションのうち。

戸張孤雁 とばりこがん 1882-1927

「男の胴」

明治42年(1909頃) ブロンズ

作者はニューヨークで絵画を学んだが、荻原碌山の刺激で彫刻に転じる。弟子の山本豊市(本学彫刻科教授)寄贈。

荻原守衛 おぎわらもりえ 号 碌山 ろくざん 1879-1910

「トルソー」

明治40年(1907) ブロンズ

画家をめざしてアメリカ、フランスに留学し、ロダンの「考える人」に衝撃を受けて彫刻家になる。本作は碌山記念館の石膏原型より鑄造。

「坑夫」

明治40年(1907) ブロンズ

第7回太平洋画会展(1909年)出品。長野・碌山記念館の石膏原型より鑄造。

山本安曇 やまもとあずみ 1885-1945
「花瓶」
明治45年(1912)青銅 鑄造
同郷の荻原碌山の作品の鑄造を手伝い、その後は「无型」
同人として工芸の革新運動に加わった。卒業制作。

横田秀一 よこたしゅういち 1879-?
「自鑄像」
明治38年(1905) 青銅 鑄造
卒業時に伝統的に油画科学生に課せられた自画像ならぬ
「自鑄像」。鑄金科卒業制作。

松橋宗明 まつはしそづめい 1871-1922
「西行法師附小児」
明治32年(1899) 青銅 鑄造 杖後補
盛岡の南部鉄瓶の復興に尽力し、その歴史に名を残すこ
とになる松橋の卒業制作。設置した南部鑄金研究所から
内藤春治らがでた。

原安民 はらやすたみ 1870-1929
「吉田松陰像」 よしだしょういんぞう
明治28年(1895) 青銅 鑄造
明治28年、鑄金科創設間もない頃の卒制。原が残した美
術学校在学中の資料は近代美術史に多大な貢献をした。

桜岡三四郎 さくらおかさんしろう 1870-1919
「観音半身像」
明治27年(1894) 青銅 鑄造
東京美術学校鑄金科1回生の卒業制作。その後日本美術
院創立に参画、明治39年から44年まで教授を務めた。

4

ヴィンチェンツォ・ラゲーザ 1841-1927
「日本婦人(島田髷)」 にほんふじん(しまだまげ)
明治9-15年(1876-82) ブロンズ
デンマーク国立博物館に所蔵される同作者の「くめコン
ドル像」と酷似。日本近代建築の父ジョサイア・コンド
ルの妻の像である可能性が高い。

「日本の大工」
明治9-15年(1876-82) ブロンズ
ラゲ ザは明治9年に工部美術学校彫刻科の教官として
来日し、15年に帰国した。その間の作品である。背中の
刺青にご注目。

「日本の俳優」
明治13-14年(1880-81頃) ブロンズ
モデルは市川団十郎とされる。

「ケレル女像」
明治5-9年(1872-76頃) ブロンズ
本作は清原玉寄贈の石膏像より鑄造されたものだが、酷
似する石膏像が東京大学にも所蔵され、工部美術学校の
教材であったと見られる。

「山尾庸三像」 やまおようぞうぞう

ブロンズ
「工学の父」と呼ばれる山尾庸三はロンドンで造船、製
鉄を学び、帰国後工部寮(元東大工学部)の開設に尽力。
平成12年に原型が山尾信一氏より寄贈。

「清原玉像」 きよはらたまぞう
明治11年(1878) ブロンズ
モデルは18歳頃の清原玉。翌年、作者と結婚し、とも
にイタリアに渡り、玉はエレオノーラ・ラゲーザと名乗
る画家となる。

「黒田長溥像」 くらだながひろぞう
明治14年(1881) ブロンズ
筑前国の黒田長政の流れをくむ黒田藩(福岡)の11代目
長溥は特に洋学など学問奨励に生涯をささげた。

荻原守衛 おぎわらもりえ 号 碌山 1879-1910
「女」
明治43年(1910) ブロンズ
碌山が亡くなる直後、第4回文展に出品。台座に刻まれ
た「碌山作」「安曇鑄」は同郷の山本安曇との関わりを示
す。

北村西望 きたむらせいぼう 1884-1987
「男」
明治45年(1912) ブロンズ
建畠大夢・池田勇八らと彫刻研究会「八手会」を結成。
美校の卒業制作である本作は、93歳の時(昭和52年)
作者より母校に寄贈。

建畠大夢 たてはたたいむ 1880-1942
「悶へ」 もだえ
明治44年(1911) ブロンズ
北村西望のよきライバルとなる。本作は石膏原型の卒業
制作より鑄造。

池田勇八 いけだゆうはち 1886-1963
「笛声」 てきせい
明治40年(1907) ブロンズ
石膏原型の卒業制作より鑄造。同期の朝倉文夫から動物
彫刻家の道を進められ、「馬の勇八」と知られるようにな
る。

藤川勇造 ふじかわゆうぞう 1883-1935
「朝露」 ちょうろ
明治41年(1908) ブロンズ
人生のはかなさをたとえる「人生は朝露の如し」。石膏原
型の卒業制作より鑄造。

朝倉文夫 あさくらふみお 1883-1964
「つるされた猫」
明治42年(1909) ブロンズ
東京美術学校研究科修了の年、第3回文展出品作。大作
の人物表現の作品とは異なる、猫をはじめとする動物へ
の愛情に満ちた小品が多く、その中で本作はその代表で
あろう。